



【祈りの小さいひざを通して御業を成し遂げていかれる神様】

聖書：列王記第一 18章 41-46節 / 暗唱：へブル人への手紙 5:7

ジョンナムテョル

説教者：鄭南哲牧師

先日、我々はエリヤとツアレファテのやもめを通して神様にささげ一口の小さいパンに含まれている神様の豊かさを学ばされました。人生における経験はとつても大切です。エリヤはツアレファテのやもめを通して一口のパンに3年6ヶ月間の食べ物が入っているのを経験しました。その小さいパン一つを食べずにささげた結果はとつてもおどろくほどこでした。ツアレファテのやもめは小さいパン一つで神様の人エリヤをもてなした結果、自分だけではなく自分の息子、そしてエリヤまできびしい飢きんから守ることができました。愛するみなさんにもこのような上からの恵みの経験がたくさんありますようお祈り申し上げます。そして信仰によって神様にゆだね、ささげた時、神様からの祝福を経験されますよう切にお祈り申し上げます。

＜聖書本文＞

今日、神様はエリヤをとおして天からの雨をふらせるために、エリヤを呼んでいます。

“それから、かなりたって、三年目に、次のような主のことばがエリヤにあった。「アハブに会いに行け。わたしはこの地に雨を降らせよ。」(第一列王記18:1)

神様からのことばをいただいたエリヤはイスラエルのアハブ王に行きます。そして、エリヤはカルメル山で四百五十人のバアルの預言者と四百人のアシェラ預言者と戦います。エリヤはどっちの神がまことの神なのか、どっちの神が天から火をくだすのか確かめてみようと思(いど)みます。

バアルとアシェラの預言者たちは長い時間自分たちのやり方で自分たちの神々に天から火を下してくださいように叫びますが、なんの反応はありません。すえには自分たちの体に傷をおわせ血を流すほど、切に求めますが、何の反応もありませんでした。そして、つぎにエリヤが祈ります。第一列王記18章36-37節をどなたか読んでくださいますか。

彼が祈ると、神様はエリヤの祈りを聞き入れてくださって天から火を下してくださいます。スリル満点の戦いでした。850対1の戦いで神様はご自分の全能さと生きておられることをエリヤを通してあらわし、大勝利を許してくださいました。今日の本文はその大勝利の直後に起こった出来事です。エリヤはこの勝利の後、再び、カルメル山にのぼります。今回は神様に神様の約束どおり雨を降らせてくださるように祈ります。3年6ヶ月の間、降らなかった雨が降るように祈る中で、彼が求めたのは雨のサインでした。エリヤは若い者に海のほうを見るように言います。雨のしるしがあるのか報告させました。エリヤが七度目祈った時、天から手のひらほどの小さい雲が上ってきます。(44節)

エリヤは人の手のひらほどの小さい雲をみて大雨を予測しています。(45節)。まだ、大雨は降らなかったですが、エリヤはその小さい雲が上ってくるのをみて神様からの答えとして確信を持ち、彼の信仰の通しりに3年6ヶ月ぶりに大雨がイスラエルに降るようになったのです。七度、切に神様に求めたエリヤ一人の祈りのおかげでした。

今日我々は一人のエリヤをとおして神様の御業が成し遂げられていくことをみることができます。一人の小さいひざの祈りを通して神様は大切な神様の御業をなしていかれるのです。ところが、神様はなぜ特別にエリヤ一人の祈りをとおして働かれたのかそれをさぐり、学ぶ必要があります。なぜなら、われわれもエリヤのように祈っていく時われわれの祈りをとおしても神様は働かれることを信じるからです。

1.エリヤ一人の祈りですが、彼は神様の約束のことばをにぎって祈りました。

エリヤの祈りの特徴はまず、神様の約束を握って祈ったということです。神様のお言葉は約束された小さい種のようなのです。しかし、その小さい種をいただいて祈る時神様の奇跡と御業を経験されます。

“それから、かなりたって、三年目に、次のような主のことばがエリヤにあった。「アハブに会いに行け。わたしはこの地に雨を降らせよう。」(第一列王記 18:1)”

エリヤも神様の約束のことばをいだかなかつたならば、決して大胆に、最後まで祈れなかつたと思います。

しかしみなさん! 神様はエリヤにかならず雨を降らせてくださると約束されました。ならば、エリヤがわざわざ祈らなくても雨は降るのに、なぜエリヤが祈る前までは雨を降らせてくださらなかったのでしょうか?

神様は約束されますが、その約束をただで成してくださいるのはされません。神様の約束はかならず祈りを通して成し遂げられます。

エゼキエル書36:36-37節の御言葉を読んでみましょう。

“あなたがたの回りに残された諸国の民も、主であるわたしが、くつがえされた所を建て直し、荒れ果てていた所に木を植えたことを知るようになる。主であるわたしがこれを語り、これを行う。神である主はこう仰せられる。わたしはイスラエルの家の願いを聞き入れて、次のことをしよう。わたしは羊の群れのように人をふやそう。”

この御言葉は捕虜としてバビロンに連れられたイスラエルの民がもう一度回復されることを約束された御言葉です。ここで、神様が強調されておられるのは祈りです。

“主であるわたしがこれを語り、これを行う。神である主はこう仰せられる。わたしはイスラエルの家の願いを聞き入れて、次のことをしよう。”

神様は約束されたことをかならず成される方です。しかし、それをただ成される方ではなく、我々の祈りを通して成されます。そういうわけで、祈る人が必要です。神様は約束された御言葉を人を通さなくても成就される方です。しかし、神様はそうふうになされません。神様は約束のことばを祈る人をとおして成就されます。

そして、我々も祈る時エリヤのように神様の約束のこぼを握って祈らなければなりません。私たちが聖書を学ぶ一番大切な理由もここに 있습니다。神様の御言葉が我々にとどまるとき我々はその御言葉を握って祈れるようになります。そして、その祈りがこたえられる事を経験されます。イエス様も神様の約束の御言葉を握って祈ることを大切な祈りの原則として教えて下さいました。

“あなたがたがわたしにとどまり、わたしのこぼがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。(ヨハネ15:7)”

聖書は神様の御言葉を種だと教えています。聖書には数千回の神様の約束が書かれています。その神様の約束は種のようなのです。その約束の種をいただいて求める祈りこそがまことの祈りなのです。今日エリヤは信仰の二つの翼である、神様の御言葉と祈りを広げて用いています。この約束の御言葉と祈り、両翼を広げて用いる時信仰の飛びかけることができることを忘れないでください。

2. エリヤはかわらね謙虚な姿勢で祈ります。

彼は地にひざまずいてその顔をひざとひざの間にうずめて祈りました。

“そこで、アハブは飲み食いするために上って行った。エリヤはカルメル山の頂上に登り、地にひざまずいて自分の顔をひざの間にうずめた。”(第一列王18:42)

エリヤは天から火を下した人です。イスラエルの民は彼が起こした奇跡の前で感激しました。彼を仰ぎ見ました。しかし、彼は人々からの人気にだまされませんでした。彼は大勝利の後も神様の御前で祈るために一人でカルメル山の頂上でひざまずきました。天から火を下したのは自分の力ではなく、神様の御業であることを徹底的に認めます。そして、いま天から雨を降らして下さる方もただ神様のみであることを彼はよく知っていました。なんの信仰の揺るぎも、なんの変わりもありません。神様はひたすら謙遜にささげられる祈りに耳をかたむけ、こたえて下さる方です。エリヤは生きておられる神様の御前で自分をたいした者として思いませんでした。それがまさに祈りの答えへの秘訣です。ひざまずいて顔をひざの間にうずめて祈る偉大な神様の預言者エリヤの姿はまさしく、神様の御前で神様の助けなしには何もできないという小さい者に過ぎないことを全体で表しているような感じがします。

3. エリヤの信仰の祈りは熱心で、ねばりづよい祈りでした。

エリヤの祈りからまた見出される姿勢は彼の切なさです。

愛する信仰の家族のみなさん、エリヤのように顔をひざの間にうずめてみてください。けっしてやりやすい姿勢ではありません。立って祈ることもできるし、もっと楽な姿勢で祈ってもよかったのにどうしてあんなに不便な姿勢でいのつたのでしょうか。それはエリヤの祈りがどれほど切なる祈りだったのかを表す姿ではないでしょうか？

新約聖書のヤコブ使徒はエリヤの祈りの特徴を‘**熱心な祈り**’だと言っています。**“エリヤは、私たちと同じような人でしたが、雨が降らないように熱心に祈ると、三年六ヶ月の間、地に雨が降りませんでした。”(ヤコブ5:17-18)**

一番強力な祈りは謙遜だけではなく熱心な祈りです。聖書はイエス様の切なる祈りの姿をこのように描写しています。

“イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。(ルカ22:44)”

“キリストは、人としてこの世におられるとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました”(ヘブル5:7)

熱心な祈りこそが強力な祈りです。信仰の人は油断しません。昨日の勝利が今日の勝利を保障しないことを知っています。エリヤは天から火が下されるように祈る時も熱心に祈りました。いまは天から雨を降らして下さるようにもっと切に祈っています。人々が見ているときはいくらでも熱心に祈ることができます。しかし、だれもみてないところで一人で立たされた時も熱心に祈る時こそ尊い、まことの祈りではないでしょうか。多くのイスラエルの民たちと偶像を崇拜する預言者たちの前でささげた祈りより一人でカルメル山の頂上で捧げているエリヤの祈りはもっと熱心でした。われわれはこれをもっと注目しなければなりません。もっと大切なのはエリヤは自分自身のための熱心な祈りではなかったことです。彼の祈りは今ひどいかなばつで苦しんでいるイスラエルの民のための祈りでした。神様がどうしてご自分の民への切なる祈りに答えないでいられるのでしょうか。

エリヤの祈りは熱心だけではなく、ねばりづよい祈りでした。神様の約束の御言葉を握って祈りますが、神様からのサインがあるまで、しりぞかないで続けて祈っています。エリヤの祈りは熱心だけではなく、忍耐の祈りでした。

エリヤは切に祈りながら若い者に雨が降るしるしがあるのか七度までいけと命じます。ついに七度までになったころに人の手のひらほどの小さい雲が上ってくるのをみることができます。(44節)

祈る時、忍耐をもっともう一度祈ることの大切さを学ぶことができます。もう一度祈るということは祈りぬくまでの祈りを意味します。6回目までは何も見えませんでした。ようやく7度目になって小さい雲が見えました。忍耐が必要です。

“あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。”(ヘブル10:36)

なぜわれわれはねばりづよく祈らなければなりませんか。それは我々の捧げる祈りの中に多くの人々の未来がかかっているからです。エリヤがもう一度祈らなかつたらばきっと飢きんで死んでいく多くの人々のいのちを救うことができなかつたかも知れません。なぜ我々はあきらめないで、もっとしつこく祈り、忍耐しなければならぬのでしょうか。われわれの小さい祈りの労苦と熱心がすばらしい未来を来たらせるからです。

愛するみなさんもあきらめないで、祈りながら、もう一度努力してみるのはいかがでしょうか。

考えて見て下さい。神様の人ダビデはエッサイの子らの中で八番目の息子でした。もし、エッサイが七番まで産んで、そこで

終わったならば、ダビデはこの世に存在しなかったし、神様とイスラエルの民のために用いられなかったでしょう。イギリスのスザンナは19人の子どもを産みました。その中でヨハンウェスレ(John Wesley)は15番目に生まれました。もし信仰の母であるスザンナが 14番目の子どもで終わらせたならば、イギリス教会と世界教会へのリバイバルを導いた偉大な神様の人ヨハンウェスレは用いられなかったかも知れません。我々は祈りとともに人生のどんなことにおいてももう一度ためてみるのが大切です。苦しくてもあきらめないでもう一步踏み出すことはすべての状況を完全にひっくり返すかも知れません。一番の力は信仰によって一步を踏み出すことであることを信じてください。

ジョセフマアシャル(Joseph M. Marshall)は“山の頂上に向かって、日の出に向かって、希望に向かって踏み出して一番よわい一步こそが猛烈(もうれつ)なあらしより強い。”と言いましたが、我々もこれを覚えたいと思います。

結論:<エリヤの祈りのいざは天のとびらをあけるカギです。>

今日は一人の人エリヤの祈りを通して神様の偉大な御業が成されることをみることができました。いま四方が全部閉ざされているように見えたとしてもみなさん! 天は空いています。その天を開くカギは祈りです。天のとびらをあけて偉大な神様の御手を動かすのは祈りの小さいひざであることをエリヤの教訓をとおして学ばされ、実践していきましょう。

四方がふさがれているような状況に置かれている方々もいるかもしれません。それにしてもあきらめないでください。退かないでください。もうちょっと祈りましょう。エリヤのねばりづよい祈り、忍耐の祈り、もうちょっと忍耐し、耐えることができるのは我々に信仰があるからではないでしょうか。

もう一度ためてみてください。もう一度祈って見て下さい。人の手の平ほどの小さい雲を通して大雨が降りました。(45節)エリヤの祈りをとおして天から降らされた雨は祝福の象徴であり、繁栄の象徴であり、恵みの象徴でした。

エリヤのように求める者にこのような恵みの雨を降り注いでくださると信じます。カギは小さいです。祈りのカギもとっても小さくたいした物でないように見えます。しかし、この祈りのカギだけが天のとびらを開いて神様の御手を動かすことができることを信じてください。今日からでも神様の約束の御言葉をにぎって祈ってください。信仰によって祈ることによって勝利し注がれる神様の恵みを経験されるクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族となりますように主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン!